太陽と月の祈り

朔夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
太陽と月の祈り

【Ｎコード】
Ｎ５８９４Ａ

【作者名】
朔夜

【あらすじ】
聖と闇の対立、太陽と月の対立。八人は、自らの目的のため反乱軍に加わる。帝国との激しい戦いの中、八人は出会いと別れを繰り返し成長していく。

序章「ｐｒａｙ」

【太陽と月の祈り】

――太陽と月に導かれし八人の物語――
弱い自分を変えたい青年。
自分の無力さを知り嘆く少女。
もう何も失いたくない青年。
自らの生きる意味を探す少女。
大切なものを守ると誓った青年。
大好きな人を助けたいと願う少女。
自分を救ってくれた人の役に立ちたいと思う少年。
天使になることを決意した少女。
――彼らは、旅の中で何を見つけたのだろうか――

序章「ｐｒａｙ」

広大な大地に温かな光が降り注ぐ。
青い空は何処までも続き、白い雲は風に流され消えていく。
時の流れは止まらないのだ。そしてその流れは、過去の出来事を砂の城のように変えていく。
脆くも崩れてしまう、その思い出――……。

ヴィラは、赤の城と呼ばれる隠れ里の首長の息子だった。其処はその名の通り【城】であり、ヴィラは王子という身分だった。
背はすらりと高く、艶のある黒髪、海の色にも似たマリンブルーの輝きを持つ瞳、整った顔立ち。ヴィラは世間で言う、美男子だった。

しかし、城に使える女中たちは言う。
「なんかねえ、頼りないのよ」
「そうそう、いっつもボケーっとしていて」
「あのオドオドした姿を見ていたら、なんだか嫌になっちゃうわ」
ヴィラは、彼女たちの言うとおり頼りなく、どこか抜けている情けない男だったのだ。
そんなヴィラには、幼馴染が二人居た。
一人目は、ファールという魔剣士だった。頭にいつも白いターバンを巻いていて、一見、どこかの砂漠の王子のようだった。彼は女とも取られる顔立ちで、彼の少し長めの黒髪が、その間違いを促進させていた。
二人目は、レラという武器師の少女だった。彼女はヴィラに好意を抱き、温かく接してくれている。ヴィラもまた、彼女に惹かれているのだった。
三人はいつも一緒に居た。小さい頃から、今まで。しかし、ヴィラが十六歳の時にファールは赤の城を出た。自分を見つめなおすための旅だという。そして世界中を旅して周り、四年後、赤の城に舞い戻ってきたのである。ヴィラはその間の思いを日記に綴っている。
――ファールの明るい声が聞こえない。レラと二人だけの空間は、なんだかとても広く感じる。いつ戻ってくるのかはわからないけれど、早いことを祈っている。
ヴィラたちの冒険は、ファールが赤の城に帰ってきた日から始まる。
開け放たれた窓から、風が舞い込んできた。柔らかい春の風。夏のように薄くなく、秋のように渦巻かず、冬のように棘がない、滑らかな一枚の絹のような風。それは一つの流れのようで。
レラの茶色い髪がふわりとその風にのる。風が運んできた春の匂いが、レラを優しく包んだ。
「久しぶりね、ファール」
レラが髪をかき上げながら言った。その視線の先には、ファール

が。
「本当に。でも、今までの思い出が昨日のことみたいだよ」
ファールは笑った。そして、その隣にいるのはヴィラ。
「四年っていう、長い年月だったけれども、僕たちの友情は変わらなかっただろ？」
三人は顔を見合わせて笑った。久々に見る友の顔、懐かしい声。何度夢見たことか、とヴィラはファールの肩を叩いた。レラがファールと背比べをしながら言う。
「もうっ、すっかり逞しくなっちゃって。此処を出て行ったときは、まだ成長途中だったものねえ」
「まあね。俺も旅の途中で色々なことを学んだし」
ヴィラが「色々なことって？」と聞いた。ファールは「剣術とか、この世界の歴史のこととかさ」と答えた。
ヴィラは、ベッドの傍にある花瓶から花を一輪抜き取った。鮮やかな桃色の花。ヴィラはその花の匂いを嗅ぐように鼻を近づけた。良い香りがした。
「懐かしいでしょ？　僕の部屋も」
ヴィラがその桃色の花をファールに差し出しながら言った。あら、あたしだってヴィラの部屋に入るの久しぶりだわ――とレラが言った。ヴィラがベッドに座り込んだ。そして、その隣にレラが座り込む。
ファールが窓のほうへと歩いていった。舞い込んでくる風を受け、ファールの髪が靡いた。
「帰ってきたんだなぁ……」
ファールは遠くの空を眺めた。薄らと雲がかかる空。その合間から見える、太陽の光。
レラが立ち上がりファールの横から外を眺める。
「そうよ。あんたは帰ってきたの！」
ばん、とレラが勢いよくファールの背中を叩いた。強すぎたのか、ファールは「ウエッ！」と言って背中を押さえた。ヴィラが慌てて

ベッドから飛び降りた。
「あら、やあねえ。男の子なんだから、もっとしっかり鍛えておきなさいよ」
レラは腕を組んで仁王立ちになった。
床に手をついて背中を押さえるファールと、その傍でどうしていいかわからずオロオロしているヴィラ。ファールは恨めしそうな声を絞り出して言った。
「変わんないなァ、その馬鹿力」

ファールが赤の城に帰省する、一ヶ月前のこと――……。

「……アーク様？　聞いてましたか！？」
聞きなれた少年の声で、アークは我に返った。
「あ、ああ……聞いてたよ」
目の前で眉間に皺を寄せる少年に、アークはどぎまぎと答えた。
少年はオレンジ色の髪を撫で付けるように抑えて言った。
「嘘を仰るのはやめてくださいと何回も言ったじゃないですか。僕にはわかりますからね。なんと言ったって、僕はアーク様のお傍に、六年も居るんですから」
アークは「ああ、わかったよ」とだけ言って頭を押さえた。こいつには敵わない、と。
「悪かったよ……。聞いてなかった。もう一度話してくれないか？　シャン」
シャンと呼ばれた少年は、口を尖らせて「まぁ、アーク様が聞きたいと思うような話ではなかったですけど」と言った。アークはばつの悪そうな顔をした。
「本当に悪かったと思っているからこそ言ってるんだよ……」
まいった、というような顔をして、アークは溜息をついた。シャンが横目でアークを見る。

「じゃあ、お教えしますよ。もう一度だけ。……今度居眠りしたら、僕が代わっているアーク様の書類の処理、ぜーんぶアーク様にやってもらいますよ。そうなったらアーク様、剣術の稽古も、兵の訓練も、何にも出来なくなっちゃいますけどね」

アークはがっくりと項垂れた。アークは、この広いジアム大陸の約半分を治めている、ディテス国の城に仕える剣士だった。アークは城の兵士たちをまとめる、誇り高い騎士でもあった。アークは、その黒い髪、黒い鎧から、【黒の騎士】と呼ばれ、国民の信頼を集める存在だった。ディテス国王も、アークを心の底から信頼していた。なぜならアークは、ディテス国王に忠実で、腕もたち、リーダーシップのある男だったからである。ディテス国に住まうものたちは皆、アークを尊敬していた。アークの側近であり、城の魔導士であるシャンも、その一人だった。

「あー……それだけは勘弁してくれよ。最近疲れているんだ――言い訳になるかもしれないけれど。頼む」

シャンは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「陛下が、こう仰られたのですよ。『最近、ルダルフ帝国の動きが思わしくない。近頃、魔物という物騒な生き物も姿を現し始めた。魔物は、伝説上の存在ではなかったのだ。魔物には、ルダルフ帝国が絡んでいるのではないか、と私は思っている。誰か、城のものでルダルフ帝国の動きを調べに行くものはいないか』……と、まあこんな感じに。アーク様がこの間、留守にしていらした時ですよ」

「ルダルフ帝国が？　我がディテス国とも同盟を結んでいる、あの……」

アークは動揺を隠し切れないようだった。

「帝国……青の城が……」

ルダルフ帝国は、ディテス国のあるジアム大陸とは反対側の大陸、ドゥール大陸にあった。ルダルフ帝国は、皇帝ルダルフが治める場所で、軍事力は世界最大と言われている。帝国は、表では（金持ちや、ディテス国などの大きな勢力を持つものに対して）よく接して

いるが、一方、貧困の激しい村などでは罪無き人々を捕まえ、奴隷として働かせているのである。そして、帝国は世界を統一し、その頂点に立つことを夢見ているのだ。（これはディテス王が皇帝を尋ねたとき、皇帝が大臣に話しているのを聞いてしまったのである）これは帝国側がばれない様に慎重に事を運んでいるので、殆どの人はそのことを知らないのだ。

帝国は、城壁を全て青色にしてあるので、いつからか【赤の城】に対し、【青の城】と呼ばれるようになったのである。（赤の城は、別に赤くもなんともない。普通の城である）帝国は、赤の城とは正反対の方向にあり、忍者たちの住まう赤の城とは違い、色々な軍事兵器を持っていたので、そういうところからも赤の城とは対立していた。（永遠の好敵手のようなものである）

「陛下は、反乱軍を立ち上げようと考えております」

「バカな！」

アークが机の上にあった書類を薙ぎ払った。シャンはぎょっとして一歩後ずさりした。

「青の城は世界一の軍事国家。我が国だけで、立ち向かえるはずが無い！」

拳をきつく握り締めるアーク。

シャンがぼそりと言った。

「勿論……陛下も、我が国だけでは立ち向かうことなど無謀だとわかっていらっしゃるでしょう。でも、僕は帝国のやり方に反対するものたちが、このディテス国以外にもいると思うのです」

弱弱しい声だった。アークは横目でシャンを見た。

「……陛下に話がある。シャン、お前もだ」

「はい、わかりました」

シャンはぺこりとお辞儀をすると、部屋を出て行くアークの後ろをつけていった。

「陛下、お話があって参りました」

「うむ、入るがよい」
威厳のある声がした。アークは「はっ」と答え、（シャンは、お辞儀だけした）ディテス王の前にすっと進んだ。
ディテス王は、アークとシャンの顔を交互に見て、それからアークのほうに向き直った。
「我が国一の剣士アーク。私に何用なのか」
「はい。ルダルフ帝国の件で参りました」
シャンはちらりとディテス王の顔を見た。王の口がぎゅっとひもを結んだように一直線になったのに、シャンは気がついた。
「私の側近、シャンから話を聞きました。ルダルフ帝国の動きのことを……。そして、陛下が反乱軍を立ち上げようとなさっていることを」
アークは顔をあげようとはしなかった。（それが礼儀だと知っていたのである）
「ほう……それで、私に話すこととは？」
アークは静かに頷いた。アークはいつもどおり冷静だった。一方シャンは、王様の前に出ることなど初めてのことだったので、とても緊張していた。足は小刻みに震えていた。シャンはそれを何とか抑えていた。
「はい。レジスタンス活動を、私に任せていただけないでしょうか」
ディテス王は驚き、立ち上がった。
「何と！？」
「……陛下。今此処で陛下が反乱軍を立ち上げ、指揮し始めてしまえば、帝国の知るところとなります。そうなってしまえば、反乱軍はおしまいです。ですから、表では帝国と同盟を結んでいる国と見せかけ、裏では私が内密にレジスタンス活動をする……どうでしょうか」
ディテス王は唸った。
「確かに、そなたの言うとおりかもしれん。しかし、何もそなたが指揮をとらなくとも」

「陛下！」
王の傍に居る兵士も、ずっと顔を下に向けていたアークも、アークのほうを見ていたディテス王も、一斉にシャンを見つめた。
シャンは顔を上げ、真っ直ぐにディテス王の瞳を見ていた。
「陛下、アーク様を心から信頼なさっているなら、アーク様にお任せすることはできないのですか？　僕は、アーク様を心から慕っております。この国のことを考え、いつでも陛下に忠実だったアーク様……。アーク様ならきっとやってくれると、僕は信じて疑いません。決して！」
シャンは叫んだ。力いっぱい。アークはシャンがそんなことを言うとは思って居なかったので、呆気に取られていた。
ディテス王はじっとシャンの青い瞳を見つめた後、静かに頷いた。
「よかろう。反乱軍のことは、全てアークに任せるとする」
ぱっとシャンの顔が明るくなった。頬に差す赤み。
「本当ですか！」
アークも目を見開き、ディテス王の顔を確りと見た。
ディテス王は玉座に座りなおした。
「私たちのほかにも、帝国のやり方に反対する者たちが居る。そのものたちとの結束を強め、どうかこの世界を救ってほしい」
アークは確りとその言葉一つ一つを心に刻み込んだ。そして言う。
「はい！　必ずや、帝国の野望を打ち砕いて見せます！」
これは、この世界全てを混沌とさせる悪夢の始まりでしかなかったのである。

――最初に行く場所は、決まっている。
アークとシャンはその後、城を後にした。

「あら？　お客さんがきたみたいよ、ヴィラ」

レラが窓の外を見て言った。ヴィラがベッドから飛び起きた。
「ええ？　父さんは……」
ヴィラがしゅんと肩を落とした。
「王様なんて居ないて知らなけりゃ、出かけてても来るでしょ。王様と同じような役割のヴィラが居るんだから、別にどうってことないよ」
ファールが肩をすくめて言った。レラが「そうね」と言って苦笑した。
ヴィラが口を尖らせた。
「あーあ、じゃあ僕が対応しなくちゃいけないじゃないか」
まあ、とレラが腕を組んだ。
「将来の王様が何言ってるのよ。王様になったら、色々なところを回って挨拶したりするのよ！」
ヴィラはレラに背中を押され、部屋の扉のところまで来てしまった。ファールが「俺もついて行こうか？」と心配そうに言った。
「甘やかしちゃだめよ！」レラが言う。
そんな時、部屋に一人の兵士が飛び込んできた。三人は驚いてその場に固まる。兵士はなんなんだろう、とでも言うような表情を浮かべた後、言った。
「王子、お客様です。ディテス国から、剣士と魔導士が」
ヴィラは顔を顰めた。ディテス国といえば、赤の城とは大分違う。ディテス国には、腕のいい剣士が居れば、頭の良い学者も居る。沢山の魔導士も居るし、彼らが発明したものは数知れない。そんな国の剣士と魔導士が、何故こんな辺境の国へ？
「今すぐ通せ、さあ、早く！」

門の前には二人の異邦人が立っていた。一人は黒髪に緑の瞳で、黒い鎧を身に着けている。剣士のようだった。もう一人はオレンジ色の髪に青い瞳、クリーム色のローブを纏っていた。（前が開いて

いて、中に着ている服と穿いているズボンが見えるようなローブだった）

二人は兵士に「確認を取ってくるので、少々お待ちください」と言われたまま、この門の前に突っ立っていたのだ。

「遅いな……」

「遅いですね……」

二人がそう呟いたのも束の間、門が開き、先程の兵士がやってきた。

「王子に確認を取りました。どうぞこちらへ」

兵士の後についていこうとすると、向こうから三人の男女がやってきたので、二人は立ち止まった。三人は、紛れもなくヴィラとファールとレラだった。ヴィラが一歩進み出た。

「赤の城の王子、ヴィラです」

ヴィラはがちがちと言った。その声からは、緊張していることがよく分かった。

剣士は深く礼をした。その後について、魔導士。

「ディテス国の剣士、アークです。此方は、私の付人の魔導士シャンです」

「な、何のご用件でしょう？」

ヴィラは自分の足が小刻みに震えていることに気がつくと、視線を右から左へと移した。それに気づいたレラが「しっかりしなさい！」と小声で言った。

「実は――……」

アークが話し始めたその時、甲高い声が響いた。

「きゃあああああああっ！」

ぎくっとしてアークとシャン、そしてヴィラとレラ、案内人の兵士が固まった。皆の視線が一点に集まる。その先には、「私は乙女よ」とでも言うように両手を合わせ、キラキラと目を輝かせているファールが居た。

ファールがアークに近づき、言った。

「かぁっ！　……こいー！　この人こそ、【俺】の運命の王子様だぁぁぁぁぁ」
ファールはそう叫ぶと、アークにがばっと抱きついた。アークは驚きのあまり、目を見開いて固まっている。隣にいるシャンは既に青ざめた顔で、今にも倒れそうだった。
ヴィラがわなわなと手をファールの方に差し伸べた。
「ふぁ、ファール？」
ファールはそんなヴィラの声など聞こえないかのように、真っ直ぐにアークを見つめていた。
「ああ……この艶のある黒髪、深い緑色の瞳。逞しい体……まさに夢で見た、白馬に乗った王子様ぁ！！　大好きだぁー！」
レラが口を押さえて一歩引いた。
「あ、あんた正気なの？　その人、男の人じゃない！」
ファールはぎゅうっとアークにきつく抱きついた。アークはまだ放心している。
シャンが口をぱくぱくさせていた。そして、何とかものを言えるようになったのか、叫んだ。
「あ、アーク様に何を！　下がれ！　この方は、ディテス国一の剣士、アーク様だぞ！」
そんなことは関係ない――とでも言うように、ファールはアークから離れなかった。
シャンの叫び声でようやく我に返ったのか、アークはファールの肩に手を置き、静かに言った。
「すまない。私は、あなたの気持ちに答えることはできない。恋愛など、剣士には必要ないからな。今は、そこのヴィラ殿に話しがある。すまないが、どいてくれまいか」
アークは優しい笑顔で、きっぱり断ったつもりだった。これが常識だ、と。相手を傷つけないようにするには――相手に悲しい思いをさせないようにするには、優しく、それでいてきっぱりと断るしかない。アークは誰かを好きになったことなどないのに（告白など

したことが無い）、何故かこんな考えを持っていた。
ファールはささっとアークから離れると、にっこりと笑いながらアークを見つめていた。
その様子を見ていたレラが呟いた。
「もしかして……あの人、ファールが男だってこと気づいてないんじゃないかしら」
それを運悪く聞いてしまったシャンが小声でレラに話しかけた。
「えっ？　女の方じゃないんですか？」
その会話を耳に挟んだヴィラが、ひょいと二人の間に入って言った。
「男だよ、ファールは。それにさっき、【俺】って言ったでしょ？」
はっとし、シャンは先程のファールの言葉を思い出した。
――かぁっ！　……こいー！　この人こそ、【俺】の運命の王子様だぁぁぁぁぁ。
シャンは親指の爪を噛んだ。――アーク様は、ディテス国でも女中たちに人気があったけれど……男の人にも受ける顔立ちなのでしょうか……。全く、頭が痛くなるなァ。
「ヴィラ殿、私が参った理由は――……」
「ちょっと、やめてよ！」
次にアークの言葉を遮ったのは、ヴィラだった。ヴィラは顔の前で両手を振っていた。
「ヴィラ殿だなんて。そういう改まったの、僕嫌なんだ。それに、君――アークっていっつも【ワタクシ】って言ってるの？　改まって言ってるなら、やめてよ」
シャンがヴィラの耳元で囁いた。
「すみませんが……おいくつですか？」
「二十歳だけど」
「アーク様は、二十三ですよ」
ヴィラがぎくりとして肩を震わせた。
「げっ……年上？」

「そういうことになりますね」
「うわぁ……年上に向かって偉そうなこと言っちゃったなァ、僕」
ヴィラが呻いた。
アークが顔を顰めた。
「シャン、何を言ったんだ？」
シャンはしれっとして答えた。
「ヴィラさんの年齢をお聞きして、アーク様の年齢をお教えしただけですよ」
アークは頭を掻いた。
「あのなァ、シャン……。お前……」
「何がしたいんだ？　とでも言いたいんですか？」
アークがぎょっとして一歩後ずさった。
「どうやら、その通りだったようですね」
ふふん、とシャンが腕を組んで笑った。ヴィラが呻いた。
「あのさぁー。そういう話は後でいいから。何でアークが来たのか説明してくれる？　あー、君、もう下がってて」
ヴィラが後ろに居た兵士に命令した。兵士は「はい」と言って城の中へと消えていった。
今まで散々邪魔してきたくせに――とアークは眉間に皺を寄せた。全く、赤の城の王子はなんという人なのだろう、とアークは思った。アークが今まで会ってきた王族は皆、礼儀正しく、このようなチャラチャラしたものではなかったからだった。（実際、ヴィラはチャラチャラというよりなよなよであるが）シャンが口パクで「話したらどうですか？」と伝えた。アークは腕を組んだ。
「じゃあ、あんたの言うとおりにするぞ、ヴィラさんよ。俺とシャンが、此処【赤の城】に来たのは、陛下の命令を受けてなんだ」
シャン以外全員がごくりと唾を飲み込んだ。
「俺が受けた命令、いや、正確には俺が志願したんだが――ルダルフ帝国は知っているな？　赤の城に対し、青の城と呼ばれている。この世界で最強の国だ。……最近、その帝国の動きが思わしくない。

近頃現れ始めた魔物も、帝国が魔界と呼ばれる場所から呼んだのだと、城の学者、魔術師たちは言う。ディテス国も、その帝国の動きに警戒を強めている。そこで、だ」

アークがちらりとヴィラを見た。ヴィラはぎょっとして飛びのいた。

「俺は、陛下に頼んだ。レジスタンス活動――つまり、反乱軍を指揮させてくださいと。陛下は了承してくださった。でも、ディテス国だけで帝国に立ち向かえるはずが無い。ということで、俺は仲間を――反乱軍側に着く人を集めることにした。そこで、俺が最初に着目したのは――わかるよな？　青の城に対する、そう、【赤の城】を味方につけること。それであんたを訪ねてきたんだが――……」

どうだ？　とアークは眼でヴィラに聞いた。ヴィラは決断に迷っているらしく、視線を右に移したり左に移したりしていた。そんなヴィラを見かねてか、レラが背中を突付き、小声で言った。

「ちょっと！　早く返事しなさいよ……」

ヴィラは指を唇に当てた。震えているのがわかる。今、自分はとても重大な判断を任されているのだ――……。

――此処で断れば、赤の城は青の城に加担したと見られるかもしれない。そうなれば、やられる。赤の城は落ちること間違いなしだ。でも、此処で反乱軍に入ったら……それが青の城にばれたら……。でも……。

ヴィラは肩を震わせた。ファールが心配そうにヴィラの顔を覗きこむ。「大丈夫か？」

ヴィラは震えながらも頷く。

「返事はどうなんだ？　王子サマ」

「アーク様、そんなに急かさなくとも」

「だーめだ。俺たちはこれから色んなところを回んなきゃいけないの！」

「……はあい」

ヴィラはふっ、と生前の父の言葉を思い出した。

――お前の好きなようにやりなさい……。
優しい笑み、そして言葉。自分を思い、そして逝った父。その父の代わりになれない自分を悔やむ。
「決めた」
レラがびくりと肩を震わせた。手を胸に押し当て、静かに呼吸を整えた。
ヴィラがアークを指差した。その青い瞳は、確かにアークの碧玉の瞳を捉えていた。
「僕と勝負して？　それで、君が勝ったら、赤の城も反乱軍に参加しよう」

第一章「想い」

第一章「想い」

一

――僕と勝負して？　それで、君が勝ったら、赤の城も反乱軍に参加しよう。

その言葉に、アークは唇を噛んだ。――バカにしているのか。

握った拳が震えていた。こう見えても、ディテス国一番の剣士。それに、ただの忍者城の王子が勝負を仕掛けてくるとは。勝負は見えているっていうのに。

アークはヴィラを睨んで言った。

「俺はそんな無意味な戦いをするつもりはない。俺には、剣士の誇りってもんがある」

レラが前に飛び出た。「ヴィラ！」

ヴィラの肩をしっかりと掴み、揺さぶっている。

「ねえ、何言ってるの？　あんたなんかが、勝てるわけ無いじゃない！」

ファールは口をへの字に曲げて立っていた。あのヴィラが、こうもきっぱりと言い切るなんて。いつもなら、「でも、だって」ばかり言っているくせに。

「僕は前言撤回するつもりないよ。君が戦わないというなら、僕だって反乱軍に参加しない。別に帝国に協力するわけでもないし」

ヴィラは先程のオロオロとした表情は見せていなかった。そして、アークからフイと顔を背けた。アークはその鋭い目でヴィラを睨み続けていた。

「俺もだな。しかし、このまま手ぶらで次にいけるわけが無かろう

？　それに、このままだと、世界が死ぬぞ！」
　その台詞に、ヴィラは反射的に顔をアークのほうに向けていた。世界が死ぬ、ということ。それは全人類の――いや、この世に存在する全ての死を意味する。星も、この空も、全て死ぬ。
　ヴィラは拳をしっかりと握っていた。汗で少しぬるぬるとする。
「ただ単に、戦うのが怖いだけじゃないか」
　ポツリ、とヴィラは呟いた。
「きっとそうなんでしょ？　だから、僕の挑戦も受けられないんだ。それとも、僕が王子だってだけで、なめて掛かってる？」
「なんだとっ！」
　アークがぐっと体を乗り出した。それをシャンが慌てて押さえた。
「アーク様ぁ……」
　シャンが今にも泣きそうな顔で呟いた。アークははっとして、シャンの頭をそっと撫ぜた。柔らかいネコっ毛の髪がとても気持ちよく感じる。
　ふぅ、と一息ついてアークは言った。
「すまないな、シャン」
　シャンはふるふると首を横に振った。「いいんです」
　シャンはアークから離れると、キッとヴィラに向き直った。
「すみません……ヴィラさん。あなたの挑戦は、受けられないんです」
　アークが顔を背けた。ヴィラは顔を顰めて、シャンを見ている。
　ふっ、とヴィラが笑った。
「じゃあ、やっぱりあれ？　怖いんだ？」
「そういうことでは……」
　レラははっとして、アークの顔を見た。緑色の瞳に映る、何か。アークが拳に力を入れていることに、レラは気がついた。
　レラはヴィラの腕を引っ張った。
「ねぇ……どうしてそういうこと言うの？　ヴィラにだって、色々あるでしょ？　どうしてわざわざ戦わなくちゃいけないの……？」

ファールがヴィラの肩に手を添えた。
「そうだよ、ヴィラ。いつものお前らしくない」
「うるさいっ！」
ヴィラは二人の手を振り払った。レラはその反動で尻餅をついてしまった。ヴィラははっとした。一瞬止まり、レラの顔を見る。
「あ……」
振り払った手が、空を過ぎる。青色の澄んだ瞳から、零れ落ちる涙。
「どうしたの？　ヴィラ……なんか変だよ」
泣かせてしまった――ヴィラは後悔の念で一杯だった。でも、これだけは言うまい。絶対に言ってはいけない。
ヴィラは握っていた拳を開いた。
「僕には僕の理由がある。だから、こんな決断しか出来ない僕を、許してほしい。許す、許さないとかではなく。今は――」
其処まで言って、ヴィラは言葉を切った。言いたいけれど、言うわけにはいかない。それが約束だから。
――お前が必要だと感じたときに話しなさい。
ヴィラはかぶりを振った。いいや、まだだ。まだその時ではない。時を待たねばいけない。
ヴィラは口をぎゅっときつく結んだ。
アークがちらり、とヴィラを見た。
「俺だって理由くらいあるさ。此処にいるやつら皆に。人間、誰にも知られたくないことぐらい誰にだってある」
アークが俯いた。ファールは地べたに座り込んでいるレラを立たせた。「大丈夫？」
レラは静かに頷き、涙を拭った。
「私、もしヴィラが反乱軍に行かないなら、殴っちゃう」
はっ、とアークが顔をあげた。ヴィラは開いた拳をもう一度握りなおした。
「もう一回言うよ。私、ヴィラが反乱軍にいかないなら殴っちゃう」

ファールはレラの足が震えていることに気づいた。そして、視線をヴィラに戻す。
シャンが心配そうに近づこうとしたが、アークに遮られた。シャンは不思議そうにアークを見上げた。
レラはヒック、ヒックとしゃくり上げながら言った。
「私は、ヴィラの傍に居たけど、ずっと居たけど、理由なんて知らない。ヴィラの全てを知ってるわけじゃない。だから、わからないけど、今のヴィラの判断は間違いだと思うよ？　この場合、誰が悪いかははっきりしているんだもの。魔物たちが、この世に現れたのは、ぜーんぶ帝国の仕業なのに。なのに、何にもしないなんて。おかしいよ、そんなの」
ヴィラはフイ、とレラから顔を背けた。アークは頭を掻いた。
「……一日だけ待つ。返事はそれからでいい。よく考えてみてくれ」
明日もう一度来る――そういってアークとシャンは赤の城を後にした。
残されたのは、三人と、そして空虚感と。
この胸に開いた、穴。

二

ヴィラは自室のベッドで転げまわっていた。落ち着かない、そしてまだ決められないで居る自分に腹が立つ。
もう満月が空高い場所に昇っている時間なのに、ヴィラはまだ寝付けないで居た。寝る気分にもならない。寝てしまえば、みんな忘れられる――否である。その時間には限りというものがある。起きたら朝、それでアークに答を問い詰められるようなことにはなりたくない。まだ、どっちつかずのまま。
ヴィラは額に手を当てて呟く。

「中立って、ないのかなァ……」
一番戦いたくないのは、自分だ。それに、無謀な挑戦だったこともわかっている。鎧もつけて、威力のある剣を振り回せる、アークに敵うわけが無い。こっちの持っている武器といえば、手裏剣と細い忍者刀のみ。そんなに重い装備をつけられないので、一度斬られればおしまいである。（まあ、アークもできるだけ致命傷をつけないようにやるつもりだろうが）
戦いに不慣れな自分。皆から、【頼りない王子】の銘をつけられてしまっている。自分でもわかっている、だけど、どうしようもないのが現実。
ヴィラはシーツをぎゅっと握った。
「こういうとき、父さんならどうしたかな……」
脳裏に浮かんできたのは、優しい父の笑顔。時には厳しく、忍者刀や手裏剣の指導をしてくれた。
ほろり、と一滴の涙が頬を伝う。
「……僕は、ファールやレラみたくはなれないよ。僕は弱いんだ。だから、僕は皆に受け入れられるような王にはなれない。僕は……僕は……」
呻きに近いその呟きは、ヴィラの頭の中でこだましていった。

父さん。

幼き日に、一緒に散歩した道。舞い落ちる色とりどりの落ち葉が、眼を潤してくれた。繋いだ手。温もりの伝わってくる、父さんとの繋がり。思えば、父さんと手を繋いで歩いたのは、それが最後だったのかもしれない。
母さんは僕を産んだときに亡くなり、父さんはおおいに哀しんだそうだ。母さんの記憶はあまり無い。微かに漂うミルクの匂い、優しい声。顔は、肖像画で見ただけだった。父さんはそれ以来、僕をちゃんとした人に育てようと努力したらしい。その結果が、これだ

った。頼りなく、情けない、ひ弱な王子様の出来上がり。
赤の城の代表として、皆を率先していかなくちゃならないのに。決められないんだ、なにもかも。法律だって、今あるものをただ守っているだけ。新しく追加なんてできっこない。だって、どういうものが皆にとっていいのかわからないんだもの。
僕を叱咤したり、優しく頭を撫ぜたり……。父さんは僕にどんな人になってもらいたかったのだろう……。
あの剣士と決闘すれば、何かが見つかる気がした。
勿論負けることぐらいわかってる。力もないし、丈夫な鎧も無い。素早さはこっちが上回るとしても、無理だ。勝てっこない。
反乱軍に入ったとしても、役に立てるのだろうか？
その答を出してほしかった。「俺と戦って、骨がありそうなら入れてやる」そうやって言ってくれれば、一番良かった。
力が無いことぐらいわかってるから、僕は無力だから。だから、僕に何かをさせて。

「世界が死ぬ……か」
僕はアークにとって失礼な態度を取ってしまったんだ。剣士としての誇りに傷をつけてしまったんだ――ヴィラは悔しさの念で一杯だった。後から後から、アークに悪いような気持ちが押し寄せてくる。
ごめん。
その一言ぐらいいえないのか、とヴィラはごろんと寝返りを打った。ふとヴィラは窓の外に月が輝いているのに気がついた。ベッドから身を起こし、窓を開ける。ヒヤリとつめたい夜風が入ってきた。
青白い光が静かにヴィラを照らす。月は薄らとヴィラに笑いかける。
ヴィラは微笑んだ。
「僕も変われるだろうか……父さん」
手を月に向かって伸ばす。父の幻影が温かい手を差し伸べている。

握った――手は空を掴んだ。ヴィラははっと現実に引き戻された気がした。
――逃げちゃダメだ。
ヴィラはそう心の中で幾度も呟いた。自分自身の心にしっかりと刻み込むように。
――僕の意思で、いえるように……。

夜は明けていった……。

翌日、レラはドキドキしながらそのときを待っていた。窓辺の椅子に座って、アークとシャンが再び赤の城を訪ねてくるときを。（彼らは近くでテントを張っていると言っていたのである）
胸に手を押し当て、自らの鼓動を聞く。早鐘のように鳴る心臓。ドクン、ドクンと。
レラが一人窓の外を見ていると、キィと扉が開く音がした。レラは驚いて振り向いた。ファールだった。
「や。昨日は眠れた？」
レラはふるふると首を振った。ファールは「やっぱりね」といって苦笑した。
レラが俯く。
「私……間違ったこと言っちゃったかしら。ヴィラがもし反乱軍に入らないって言ったら、私赤の城に盾突くことになっちゃうわ。そうしたら」
レラが思わず立ち上がった。椅子がガタンという音をたてて床に倒れる。ファールは静かに歩み寄り、その椅子を直した。
「……もうヴィラには近づけなくなってしまう。遠い人になってしまう……」
レラは胸に押し当てた手をぎゅっと握り締めた。目頭がどうも熱い。
「それはヴィラも同じだろうよ。恋人を無くす悲しみは半端じゃな

いから……」
ファールははっとして口を押さえた。レラが眉を顰めて顔をあげた。
「え……？」
「いいや、なんでもない」
ファールは慌てて手を顔の前で振った。レラはふっ、と微笑した。ファールから目をそむける。
「それでも私、反乱軍につくつもりよ。ヴィラが断っても、私は行く」
ファールはふと窓の外を見た。黒髪の青年とオレンジ色の髪の少年が、此方へ向かって歩いてくるのが見える。ファールは窓を開けた。
「……あいつは断らないさ」
「えっ？」
レラが振り向いたとき、ファールは其処に居なかった。

三

アークとシャンは、昨日言ったとおりにもう一度赤の城を訪れた。朝早く起きて、テントを片付け、顔も洗って。食事もして。
アークは紳士のたしなみとして、髪をとかしていたがシャンは全くやったことがなかった。（そのためシャンの髪はいつもパンクしたように、横方向に向かっているのであった）
二人は赤の城の城門をくぐると、（兵士はお客が来るとヴィラに言われていたので、二人を通した）真っ直ぐ城に向かっていった。
シャンは歩く途中チラチラとアークのほうを見たが、アークはキッとただ真っ直ぐに前を見ているだけだった。シャンも、レラと同じく胸の高鳴りが止まらなかった。
アークは「イエス」という答を期待していた。しかし、そんなに

簡単に行くはずも無い、という考えも持っていた。どっちにしろ、アークは今日此処を去る予定で居た。
シャンは不安になって、杖を握りしめた。
二人がそれぞれの想いを抱えながら、あと五メートルくらいで城に入る――というとき、ふと通常では考えられない場所に影が出来た。はっとして二人は顔をあげた。上のほうで何かがキラリと光った。そしてそのままそれは下へ――こっちに来る――……。
しゅたっ、と白いマントを翻し、それは着地した。アークはそれに見覚えがあった。白いターバン、そして首から下げた赤いペンダント。先程光ったのはこれだろう。そう、ファールが降ってきたのだ。シャンは驚いて飛びのいた。
ファールはニヤリ、と顔をあげた。シャンがびくりと肩を震わせて、アークの陰に隠れた。
「ふ、ふ、降ってきた！」
自分の腕にしっかりとしがみつくシャンを見て、アークは微笑した。そして、ファールの方に向き直り、その鋭い目を向ける。
「何か？　俺はヴィラ王子に用があってきたんだが」
ファールは立ち上がると、にっこりと笑った。
「やだなあ。好意っていうものを表しにきたのに、それはないんじゃないの？」
ファールは肩をすくめながら言った。そして、上を向く。
空は少し陰り始めていた。
「好意、ねぇ……」
アークが呟いた。アークは昨日テントに戻ってから、シャンにファールが男であることを聞いたのだった。アークは眉を顰めていた。
「そ、好意。これからヴィラのところにいくんでしょ」
アークはぴくり、と眉を動かすとファールをジロリと見た。ファールは動じない。シャンはまだアークの腕を掴んでいた。
「君さ、あれでしょ？　断られたらどうしようって、思ってない？」
シャンは顔を顰めた。この城は、なんと失礼な人が多いのだろう。

ディテス国一の剣士に対する、嫌がらせか？　シャンはそう考えた。
「ああ、そうだな。正直に言えばそういうことも考えている。俺はイエスであってほしいと願っているがな」
「たぶん、だけど」
ファールは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。
「あいつは断らないと思うよ」
「え？」
アークは思わず聞き返していた。そこでファールと目が合う。懐かしいような、この顔。黒い髪。屈託の無い笑顔。体つき、背の高さこそ違うものの――……。
――お兄ちゃん。
アークは唇を噛んだ。シャンが心配そうに顔をあげたのを見て、アークは我に返った。
ファールはもう一度笑って言った。
「多分、あいつは断らないと思うよ。俺の経験上」
ヴィラに返事を聞きに行ったら――とファールは道を開けてくれた。アークは深々と礼をして、すたすたと城の中へ消えていった。ファールはその背中をしっかりと見送った。
「どうしたもんかな。俺も、あいつも」
おかしいのはこのことよ――……。

ヴィラはアークが尋ねてきたことを既に知っていた。アークが城に入ると、其処にはヴィラが気をつけをして立っていたからだった。アークはヴィラの真剣な表情を見て、「答をもらえる」と確信したようだった。それがイエスなのかノーなのかはわからなかったが。
ヴィラは静かに話し始めた。
「昨日は、ごめん。君の剣士としての誇りに傷をつけてしまったことを、謝らせてほしい」
アークは何も言わなかった。求めているものは、その「答」だけかのように。

シャンは何も言うまいと、硬く口を結んでいた。そのかわり、杖をがっちりと掴んでいた。
「君の誘いに対する、答が出た」
その言葉に、アークはぴくりと反応した。からからに渇いた喉を、湿った唾が通る。
シャンはヴィラの後ろの柱の影に、人影があるのを見つけた。それは、ヴィラがどう答えるのか気になり、こっそりと聞き耳を立てているレラの姿だった。レラも自分と同じように、答が気になっていることがわかるとシャンはなんだかホッとした。自分だけではなかったのだ、と。（勿論アークは気になっていたに違いないが）
「青の城に対する、反乱軍にならないか――という誘い」
空気がピンと張り詰めた。レラの胸の高鳴りはもはや留まることを知らなかった。
爆発してしまいそうなくらいに。
次の言葉を、優しいヴィラの声が告げた。
「受けるよ。僕――この赤の城は反乱軍側につく」
アークはほっとしたようだった。シャンとレラは一気に肩の力が抜けたようで、へなへなと座り込んでしまった。それでレラが後ろに居ることに気がついたヴィラは、慌ててレラの方に駆け寄っていった。
アークはシャンの腕を掴み、立たせた。
「緊張していたのか？　俺でなく、お前が」
アークが笑う。シャンは口を尖らせた。
「外での初仕事ですからね。ディテス国からの旅を除いて」
「そうだな」
先程まで張り詰めていた緊張の糸は、いまや音をたてて切れ、バラバラになっていた。
座り込んで息をついているレラの傍で、ヴィラが囁いた。
「大丈夫……？」
レラはこっくりと頷く。

「うん、大丈夫。それよりも、ちゃんと正しい選択できたみたいだね」
「うん……」
「私、ヴィラがノーっていうんじゃないかって、心配していたの。ノーっていってしまったら、ヴィラはとても遠い人になってしまうから。そんなの私には堪えられないもの」
レラは今にも泣きそうな顔をして、ヴィラを見上げた。ヴィラは切なそうな表情を浮かべる。
「それは、僕もだったよ。それに、僕は僕自身に従った」
レラはその言葉を聞いて安心したのか、にっこりと微笑んだ。それを見て、ヴィラは満面の笑みを浮かべた。
はっ、としてヴィラは振り返った。
「ところで、アーク」
突然呼びかけられたアークはきょとんとした。そして「何だ？」と聞き返す。
「今はレジスタンス活動が繰り広げられて居ることは、青の城に知られていないけど……。もしバレてしまったらヤバい。それに、城の兵士を率いてっていうのはとても難しいことだと思うんだけど……」
「ああ、それなら」アークは笑った。
「あんたと、あんた。そう、そこのあんただ。それと、さっき窓から飛び降りてきた無謀なヤツだけついてくればいい。仲間集め、にな」
アークはヴィラとレラを指差していった。窓から飛び降りてきた無謀なヤツ、とは勿論ファールのことだった。ファールは丁度アークたちの後ろから入ってきたところだった。（アークがそれに気がついたのは、言い終わった後だったが）
シャンがアークの腕をしっかりと掴み、言った。
「ねえ、皆さん。これから行動を共にするんですから、自己紹介しませんか？　もう僕たちは仲間なんですし」

それはいいアイデアだ、とヴィラが同意した。
「じゃあ、まず俺から」
アークが一歩前に進み出た。そして、オホンと咳払いを一回。
「反乱軍の指揮をとらせてもらう、ディテス国の一剣士、アーク＝ファルシオンだ。アークで構わない」
「じゃあ、次は私ね。本当の名前は、レイヴェラ＝アドヴァンナっていうの。私はレラって呼ばれるほうが好きなの。レラって呼んでね？　武器師っていう、この国にはいまや私しかいない、とっても凄い職業なのよ。まあ、どんな職業なのかは旅の途中でわかるわね」
ファールがふふっと笑った。
「俺はファール。本名はファール＝ヒーラム。俺は魔剣士。剣に魔法をかけて、炎の剣～とか。操れんの。すごいでしょ？　好きな食べ物はたまごスープ」
シャンがアークの影から飛び出した。
「僕は、シャン。ええと、この名前はアーク様につけてもらったので、苗字のほうはちょっと。別に苗字なんてこの旅で必要ないんですけどね。ディテス国の魔導士で、アーク様の側近です」
アークがさっ、と横に避けた。そして、ヴィラに手を差しだした。
「最後を飾るのは、ヴィラ王子？」
「王子はヤめてよ」
ヴィラが呻いた。ヴィラを除く全員が笑った。
「ヴィラ＝レッド。二十歳。忍者……のなりかけ。王子だからといって、特別扱いはしないでほしい。嫌いなものは暴力」
五人は顔を見合わせた。アークが言う。
「絶対に帝国の思い通りにはさせない！　皆、これからが勝負だ！」
全員が頷いた。

もう、運命の歯車は止められない――……。

第二章「月の砂漠の乙女」

第二章「月の砂漠の乙女」

一

五人は、数時間後赤の城を発った。（なぜなら、ヴィラが城の者たちに反乱軍側についたことを宣言したため）レラの旅支度にもずいぶん掛かった。太陽は空高く昇っていた。

五人は今、砂漠の真中を歩いていた。長い、長い砂漠を。太陽が上から照りつけ、五人は汗だくになっていた。風も今は止まっている。汗はただ流れて砂に吸い込まれるだけだった。

「はぁ、此処はどこなので？」

ファールが呻くように呟いた。ヴィラが城から持ち出してきた世界地図を広げた。

「ええとね、今は此処なのかな？　月の砂漠」

「どれどれ」

ひょい、とヴィラの後ろからアークが地図を覗き込んだ。

「そうだな。俺たちは月の砂漠の丁度真中くらいだろう。砂漠に入って、二時間は発つ。此処はこの世界で有数の巨大な砂漠だからなあ」

アークが笑った。ヴィラは顔を顰めて「笑い事じゃないよ」と言った。

「でも、アーク様あ。どこか日陰になる場所で休みたいです……」

シャンが呻いた。

「そうね」とレラ。

「砂漠を歩くなら夜がいいわ。暑いより、寒いほうが私我慢できるもの」

ヴィラが肩をすくめた。同じく、アークも。二人は顔を見合わせた。お互いに、「困った」というような表情を浮かべている。
「夜移動する、か。日陰があれば出来るんだけど」
ファールが苦笑した。シャンとレラはもうくたくたで、砂の上に座り込んでしまった。
「日のあたる場所で休んだって、熱いしねぇ。下が」
シャンとレラは飛び上がった。太陽の熱で砂が温められ、とても熱かったのだ。言うのが遅かったか、とファールはペロリと舌を出した。シャンとレラは足と尻を摩っていた。
「アーク、テントはもうないの？」
ヴィラが額の汗を拭いながら言った。アークは首を横に振った。
「すまん。使いきりのを一つしか持ってこなかった。旅の途中は、殆ど寝ていなかったものでな。それに、二人じゃそんなに荷物をもてない」
ヴィラは今までしっかりとアークの顔を見ていなかったので、今気がついたが、アークの目の下にはくっきりと黒い「くま」があった。ヴィラは苦笑すると、シャンの顔もじろりと見た。やはり、シャンの目の下にもくまがあった。
「なんて不健康な」
アークがふぅ、と溜息をついた。
「それほど切羽詰まってる、てことだろ。とりあえず、俺たちが次に目指すところは決まっている」
アークは地図に目を落とした。赤いペンで「×」印がつけられていた。
ファールがレラとシャンの様子を見て言った。
「もう限界だよ。二時間休みなしで歩いたんだ。レラとシャンには堪えられないんだろうさ。この状況で魔物に襲われたら終わりだよ」
「笑顔で言うなよ……」
噴出す汗は止まらなかった。汗が衣服と肌をぴったりくっつけてしまっていたので、余計に暑かった。（蒸し暑い、といったほうが

正しいかもしれない。夏、外で遊んでかえってきたら、じめじめして暑い、といったのと同じである）

ヴィラは首に巻いていたスカーフを外した。

「特に鎧なんか着てると熱いぞ。このままでは、俺は蒸し焼きになってしまう」

アークが呻いた。ヴィラは苦笑した。

「帽子か何かがあるといいんだけれど」

そう言ってヴィラはそのスカーフをレラの頭にかけた。スカーフはヴェールのような役割をした。レラは小さく「ありがとう」と呟いた。ヴィラは「どういたしまして」と笑いながら言った。それは苦笑いに近かった。

五人とも限界が近づいてきていた。特にシャンは魔導士で体力も少なく、年も一番小さかったので、もう歩けないという状況だった。

アークはペッと唾を吐き出した。

「この砂漠の真中を過ぎたあたりにあるんだ。だから、もう少し」

いつも体を鍛えているアークでさえ、自然には逆らえない。

ヴィラが忍者刀を杖にして、なんとか立っていた。ヴィラは気力の無い声で言った。

「ぼ、僕たち何処に行くんだっけ？」

それ俺も聞きたかった――とファールが首筋の汗を拭いながら言った。アークは地図の×印を見せた。レラとシャンは腕をだらんと下げている。

「俺たちが目指しているのは此処だ」

アークが地図上の×印をトントンと人差し指で小突いた。

「現在地は、此処」

今度は×印から少し下に行ったところを叩いた。×印のところから、十センチは離れているだろうか。

「縮尺によると……そうだな、ざっと十一キロってところかな」

十一キロ！？　とブーイングが飛び交った（五人しか居ないはずなのだが）。

その言葉を聞いてシャンは絶望したようだった。
「もう……僕限界……です」
目が虚ろだった。それはレラも同じだったわけで。
「私、もうだめかも……」

二人がフラリと倒れようとした。ヴィラは慌ててレラを、アークは慌ててシャンを抱えた。どさっという音がして、腕の中に倒れる。二人は顔を見合わせて、苦笑した。
「仕方ないな」と。
ヴィラは背中にレラを負ぶった。もう既に意識がとぼうとしているシャンを、アークが背中に。
この年頃の女の子を負ぶうなんてことは滅多に無いので、ヴィラはほんの少し頬を赤く染めた。最後にレラを負ぶったのはいつだったろう、と。
ファールがヴィラの顔を覗きこんで言った。その顔は「何をやっているの？」と不思議そうに聞く少女のような表情を浮かべていた。
「ヴィラ、顔赤いぞ？　何考えてるんだ？」
次にファールの表情は、妖しい笑みに変わっていた。ヴィラはもっと顔を赤くして、「何言ってるんだよ！」と叫んだ。そのときにレラが落ちそうになったので、慌てて体勢を整えた。
「いやらしいことでも考えてたんじゃないのぉ？」
ニヤニヤと笑いながらファールは言った。アークがそれを聞いて苦笑した。
「それはお前なんじゃないのか、ファール」
その言葉を聞いて、ファールはくるっとアークの方に向き直った。
「あらやだ。俺はアーク一筋だよ。誤解しないで♪」
アークは呆れたのか、溜息をついて歩き出した。その後について、ヴィラ。
「う……ん」
レラがぎゅっとヴィラの首に抱きついた。ヴィラはレラの手が触

れたときに、ドキッとした。顔はまだ赤いままだった。レラが薄らと目を開けた。
「ヴィ、ラ？」
耳元で囁かれる声に胸を高鳴らせながらも、ヴィラは「うん」といつもの優しい声で答えた。
甘い。
愛しい人の声。
「なんでもないよ、レラ。しっかりつかまっててて」
レラは優しいヴィラの言葉に、微笑んだ。
「うん」
愛しい人の背中。
伝わってくるのは、温もり。
ファールはそんな二人を、恨めしそうに見ていた。
「いい、なぁ」
その心に映るのは誰なのか。
アークは振り向き、ファールをじっとみていた。
――似ている。
自分が必ず守ると、助け出すと誓った人に。
――お兄ちゃん。
声が聞こえる。
逢いたい、でも。

どこにいるのかわからない。

一人の少女が祈っていた。大きな十字架を前に、膝をついて。
髪は太陽に似た、金色の髪。肌は白く、華奢な体つきだった。
白いワンピース。
少女は目を開けた。青く澄んだ瞳が、十字架を見上げる。
「お父様……お母様……」

合わせた手。それは、少女の悲しみが行き交うだけであった。

二

アークは欠伸をした。シャンを担ぎながら、だいぶ歩いた。ヴィラのほうも疲れきっているようだった。アークはあたりを見渡した。遠く、遠く澄んだ青い空。今はそれが恨めしい。見渡す限りは、砂、砂、砂。

「サボテンの一つや二つ、ないのかねえ」

アークが呆れるように言った。アークの行った事がある、ディテス砂漠には、サボテンがいくつかあった。サボテンさえあれば、水の補給ができる、ということだ。

ヴィラは背中に乗ったレラを落とさないようにしっかりと支えていた。

「ラクダでも居ればよかったんだけど」

ヴィラは深い溜息をついた。ただでさえ体力が無いのに、人を担いでこんなに歩いたのは初めてだったのである。それはアークも同じことで。

後ろから着いてきたファールが呻いた。ファールは誰も背負っていないので、荷物持ちを任されたのだった。アークの剣、レラの武器箱、シャンの杖、ヴィラの刀。彼はそれを一つの袋にまとめて引き摺っていた。

「その目的地とやらは、どういうところなのかいい加減説明してくれない？」

ファールが言ったとおり、アークは目的地の説明を一切していなかった。アークはやれやれとシャンを落とさぬようにしっかりと抱えた。

シャンとレラは、すっかり眠っていた。ヴィラはそれを見て苦笑

いした。
「俺たちが目指しているのは、この月の砂漠にある【月の館】だ」
「月の館？」
ヴィラとファールの声が被った。二人は顔を見合わせ、首を捻る。ファールは旅をしたことがあるといっても、その名前を聞くのは初めてだった。一方ヴィラはというと、城から殆ど出たことが無かったので、これぞ本当の「世間知らず」であった。
風がふわりと優しく、砂を舞い上げていく。風が出てきたので、先程よりはいくらか涼しくなった。しかし、まだ太陽が出ているのでかなり暑い。
「月の館は、聖を信じる、聖にだけ忠誠を誓う……そういう人が住まうところだ。帝国の悪行を見逃すはずがないだろ？」
アークがニヤリと口の端を吊り上げた。汗が一滴、首筋を伝っていった。
「聖、ねぇ」
ヴィラは呟いた。聖とは、この世にある属性というもののひとつである。火を神として祀るところがあれば、水を神として祀るところもある。そういうものは、たいてい民族によって違うものだ。このほかにも、土、風など、多くの属性がある。また、何処にも属さない無属性というものもあった。闇、聖。月の館に住まう人たちは、聖なるものを神として崇め、祀る――ということである。
大抵はクリスタルの守護により決まる。この世に四つ、クリスタルと呼ばれる清らかな水晶がある。それは、世界を守り、人々に祝福を与える【神】として崇められてきた。
風のクリスタルは、アークとシャンの地、ディテスにある。ディテス地方は、風の守護を受けている。そのため、ディテス地方に住まう民族たちは、殆どが風の属性なのである。風を信じ、風に忠誠を誓う。彼らは風の民族なのである。
しかし、その中でも少数派だが、別の属性につくものもいる。
火のクリスタルは、実は、ヴィラの故郷赤の城にあった。赤の城

のあたりは、テナー地方と呼ばれ、火の守護を受けている。そのため、【赤の城】と呼ばれるようになったのである。（赤は火から来ている）

土のクリスタルは、ファールの故郷【ベガの地】にあった。ファールは其処のことをあまり話さないので、ヴィラはベガの地のことを何も知らなかった。アーク曰く、「古い遺跡があるところ」とのこと。

水のクリスタルは、この世の中心とも呼ばれる【最後の砦】にあった。いつからその名がついたかわからないが、その砦には魔物が住み着き、人が近寄れないと聞く。しかし、クリスタルは輝きを失っていない、という。

これが、四大属性というものである。

「俺はベガの地出身だからなぁ。まあ、六歳までしかいなかったけれど」

ファールは両手を方の高さまで上げた。「さっぱり」というようなポーズだ。

「僕は火の守護」

「俺はディテスの剣士だからな。風なんだろう」

その言葉にヴィラは顔を顰めた。

「なんだろうって、其処で育ったんじゃないの？」

ふっ、とアークが苦笑する。

「十（とお）の時からな」

ヴィラとファールが顔を見合わせ、目を丸くした。そして、二人そろってアークを見たので、アークはぎょっとして一歩後ずさった。

「十？　十のときから？」

「ああ、そうだ。十のときから俺はディテスの剣士だった」

二人は尊敬ともいえる眼差しでアークを見た。自分たちとさほど代わらぬ年齢の男が、十の時から一の国の剣士とは。どれほどの実力の持ち主なのだろう、と二人は思った。

「今はディテス国一の剣士なんでしょう？」

まあな、とアークは笑う。背中にべったり張り付いたシャンをもう一度担ぎなおすと、「さあ、早く行こう」といって歩き出した。その後を、ヴィラとファールがついていく。

――十の時から、ディテスの剣士なのかあ……。

そんなにも凄い人が、今目の前に居るのだ。そう思うと、ヴィラはなんだかドキドキした。

しばらく歩くと、屋根が丸い建物が目に入った。それを最初に見つけたのはアークで（なにしろ一番前を歩いていたものであるから）ファールは大きな声を張り上げて喜んだ。その声で、シャンとレラが起きてしまった。

レラはヴィラの首にしがみついたまま建物をじっと眺めていた。シャンも同じようだった。

「あれが月の館？」

ヴィラの問いに、アークは答えた。「ああ、そうだ」

傍から見れば、異様だった。砂漠の真中にある、磨き上げられた鏡のような建物。近づけば自分の顔が映るのを確認できるに違いない、とヴィラは思った。何故なら、建物の屋根も壁も、太陽の光を反射してキラキラと光っていたからである。

ファールは眩しかったのか、手で目を覆った。

近づいていくと、その建物が大分大きいことに気がつく。赤の城よりは小さいだろうが、それは立派な建物だった。

「ヴィラ、ありがとう。此処で降ろして」

レラがヴィラの背中から降りた。ヴィラは首を横に向けたり、後ろに向けたりして、凝りを直していた。シャンもアークの背中から降りていた。アークは肩をぶんぶんと振り回していた。

四人がファールの持っていた袋の中から、自分の持ち物を取り出すと、アークは大きな扉の前にたち、トントン、とノックした。

「すみません、ディテス国のものですが」

アークは怒鳴らないように大きな声を出した。

すると、キィと音をたてて扉が開いた。アークは一歩下がった。
扉から顔をのぞかせたのは、白いワンピースを着た金髪の少女だった。青く澄んだ瞳。それは空と同じ色のようだった。
少女は数回瞬きをしたあと、言った。
「どちら様？」
可愛らしい声だった。細く、少女らしい、華奢な体つき。アークは一瞬たじろいだ。
「……ディテス国から参りました。剣士アークでございます。ここの主様に、用があってまいりました。主様を呼んでいただけぬでしょうか」
先程とは違う言葉遣いに、ヴィラは目を丸くした。呆れ、ともいって良いほどに。
少女はぺこりと礼をした。
「おじいさまのことですね？　少しお待ちになってください。今、上で絵を描いていらっしゃるので」
中に入ってください、と少女が手招きした。少女が歩く度にひらりとワンピースの裾が揺れた。
五人は中に入ると、わぁっと歓声を上げた。（歓声を上げたのはシャンとレラ、ヴィラの三人だった――というのが正しい）
床は綺麗に磨き上げられており、綺麗な翡翠の色に、自分たちの姿がくっきりと映し出されていた。アークは床をまじまじと見つめた。
床だけではなかった。天井も、壁も。全てが磨き上げられていた。
「アーク、早くしないと置いてっちゃうよ」
ヴィラが声をかけた。アークは「ああ」とだけ答えた。
――不思議な感じがする。この館。
月の館を訪れるのは初めてだった。故に、此処がどのような場所であるかはアークは知らなかったのだ。アークはそれに圧倒されていた。
時折感じる、謎の気配。

アークは後ろを振り返った。何も無い。気のせいか、と呟き彼は先を急ぐことにした。
少女は階段を駆け上がっていった。そして、その先にあった一枚の扉の前で止まると、トントンと優しいノックをした。ヴィラがレラの耳元で囁いた。「アークの叩き方とはずいぶん違うね」
少女は扉を開けた。
「おじいさま、ディテス国からお客様です」
扉の先には、一人の老人が居た。老人は椅子から立ち上がり、此方に向かって歩き出していた。アークとヴィラがさっと前に進み出た。老人はアークとヴィラの姿をしっかりと見た。
「何か、御用かな？」
優しい口調で老人は言った。アークとヴィラは一礼をした。
「ディテス国から参りました。剣士アークでございます」
「赤の城の第一王子、ヴィラです」
ヴィラは第一王子、と言ったが、ヴィラには兄弟など居なかったので言う必要が余り無かった。
老人は頭を下げ、低い声で言った。温かみのある声。
「私は、この館の主人ベリです。そこにおりますのは、私の孫のルキでございます」
金髪の少女、ルキがぺこりと頭を下げた。綺麗な青い瞳が、ヴィラとアークをしっかりと捉えていた。マリンブルーの深き輝き。
「ベリ様、私たちが参った理由は、あなた方に協力してもらいたいことがあるためです」
すらすらといつものように【敬語】を使えるアークに、ヴィラは少し気後れしていた。赤の城では、こんなに改まった口調など使っていなかったからである。それに対しては、レラも同じようだった。
ベリは静かに頷いた。アークはそれを見ると、静かに続けた。
「近頃、ルダルフ帝国の動きが思わしくなく、最近姿を見せ始めた魔物たちも、皇帝ルダルフが呼び寄せたものと思われます。そこで、ディテス国王様は反乱軍を立ち上げることを決意しました。しかし、

国王様自らが兵を率先することはできず、私が代理として反乱軍を指揮します。ディテス国だけでは、ルデアルフ帝国に敵うはずもありません。そこで、他国に協力を求めている次第です」
アークはそれだけをすらりと言ってのけた。シャンは微笑みつつ、アークの背中をじっと見ていた。
ベリは「良かろう」と低い声で言った。
チラリ、とファールがベリに目を向ける。
「しかし、今すぐに――というわけにはいかないな」
アークは顔を顰めた。ヴィラとレラは顔を見合わせ、首を傾げた。ファールは思わず下唇を噛んだ。赤い血がジワリとにじみ出てくる。それに気づいたシャンが大丈夫ですか――とハンカチを差し出した。
ベリはアークの言いたいことがわかったのか、微笑み、頷いた。
ファールがシャンのハンカチで唇の血を拭きながら、ベリをじっと見ていた。
「ルキ、下がっていなさい」
ルキははい、と綺麗な細い声で返事をすると、ワンピースをなびかせながら部屋の外に出て行った。ベリが「気にしないでください」と言ったので全員ドアの外ではなく、ベリに集中した。
静けさが、耳を貫く。ベリは口を開いた。
「あの子――ルキが天使になれるまで、それまでは、反乱軍に参加できないな」

三

おにいちゃん。
あたしはねー、ここにいるの。
いつかね、おにいちゃんがむかえにきてくれるの、まってるの。
ずぅっと、ずぅっと。まちつづけるの。だって、おにいちゃんはつ

よいんでしょ？
あたしのおにいちゃんだもん。つよいよね。だれにも、まけないよね。
だいすきだよ。あたしの、いちばんのおにいちゃん。じまんのおにいちゃん。

――いやあああっ、おにいちゃん！

ブラックアウトするそれに、アークは恐怖を覚えていた。パズルのピースのように、崩れて、また組み立てられる。ナイトメア。それは少しずつ、少しずつ蝕んでいく。体を、心を。震える肩、腕、足。汗はツーと首筋を流れていった。
背筋に、ぞくりとなにやら良くないものが走る。
アークは唇を噛んだ。そして、はっと気づく。今はベリの目の前だったのだ。
「あ……」
フラリと倒れそうになる体をヴィラが慌てて支えた。それに継いで、ファールが。
アークはふっと頭を押さえた。締め付けられるような痛みが襲ってくる。ベリが心配そうに近寄った。
「大丈夫かね……今日は、いや……とりあえず、ルキのことが終わるまで……泊まってくださらんか。もっとも、待つ時間がない、となれば別だが……」
アークはヴィラと顔を見合わせた。今回は待とう、とアークが言った。前は、ヴィラが「戦わなければ入らない」という意見をつっぱっていたため、アークは一日だけ待つことにしたのだ。時間がないのには代わりが無いが、聖の属性を味方につけることはこれからレジスタンス活動を広げることによって大きな役割を果たすのだ。なぜなら、帝国は闇の属性であり、聖とは正反対のものだからだ。

真っ向から対決すれば、大抵は聖が勝つ。そのため、アークは出来れば闇以外の属性を集めたかったのだ。
「待たせてください……しかし、天使になるまで、とは？」
ベリが静かな瞳でアークを見た。それは真っ直ぐ、翡翠の瞳を捕らえていた。その中に映る自分自身を覗き込むかのように。
「その通りのことだ。ルキ……あれは、人間ではない」
シャンとレラがアッと息を呑んだ。ヴィラとファールは、思わずアークを支える手に力が入った。
「どういう意味です？」
「ルキはこの世界のものではない。だから人間ではない。我々の指す人間、とはこの世界で生まれ育った者を言う。ルキは別世界――そう、【月の世界】と呼ばれるところの人間なんだ。其処の人たちには、真っ白な羽がある。背中に対となって」
「だから天使……」
ベリは静かに頷いた。
「ルキは月の世界からやってきた、天使族の最後の一人なんだ。しかしルキは月の世界を知らない。本当なら、儀式を行いルキは天使になるはずだった。しかし、その儀式をする前にルキの両親は無くなってしまったんだ……」
「じゃあ、あなたは？」
レラがヴィラの手をしっかりと握りながら聞いた。ヴィラは頬を赤く染めながら話を聞いた。
「私は元々ここに住んでいたものだよ……そして、天使族を受け入れた……」
シャンは俯き、先程ルキが出て行ったドアをじっと見つめた。
――別世界。
シャンは口の中で呟くと、誰にも気づかれないようにそっとドアを開けた。
レラはそんなシャンの後姿を、心に残る誰かと重ねていた。

翡翠色の美しい階段を上り終えた先に、砂漠が見渡せる広い屋上があった。シャンは屋上の柵によりかかり砂漠を眺めるルキの姿を見つけた。よし、と胸をはり、シャンはルキに近づいていく。

「気持ちいい風ですね」

その声ではっとし、ルキが振り返る。瞬きを数回繰り返した後、彼女は視線をシャンから逸らし、俯いた。

「そうですね」

優しい風がルキとシャンを取り巻く。砂漠の砂を舞い上げ、青い空の下で舞う。

ルキの肩まで伸びた金色の髪が揺れる。白いワンピースとともに。

二人の青い瞳は何を捉えているのか。

「わたし、ここにいてはいけないの」

沈黙をルキが破った。シャンの瞳は静かにルキを捉えた。ルキは柵に手を掛け、砂漠を見下ろした。黄色い砂、緑のない地。少しぼやける、向こうのヴィジョン。

「どういうことですか？」

シャンは視線を逸らさずに聞いた。ルキはまだ砂漠を見下ろしている。「わたし」

「確かに属性は聖だけど、わたしあなたたちとは違う。だって、わたしのこの背中には羽が生えているはずで、飛べるのよ。だからわたしは人間じゃない。あなたたちの仲間じゃない。存在してはいけないの」

ルキの声が、なんだか涙ぐんでいることにシャンは気づいた。ルキは続けた。

「でも、わたし天使でも人間でもないの」

柵を握っている彼女の手が震えていることにシャンは気がついた。力を込めて、握る。

シャンはなんだか肩が震えた。寒いわけではなかった。目の前に

居る自分とそれほど歳の変わらない少女が、泣いている。自分が存在してはいけない、と決め付けて。そう思って。自分の存在が怖くて、泣いている。

――僕と同じ。

小さい頃本当に泣き虫で、アーク様を良く困らせていた。怖くて。愛してもらうのが、本当に怖くて。与えられている愛が偽者なんだと思っていて。

シャンは目を瞑った。あたたかい、風。澄んだ空気。

シャンは目を開いた。ぱっと広がる青い景色に、心奪われる。その下で、嘆き哀しむ少女。

「わたしには翼が無いから。飛ぶことができないから。だから天使じゃないの」

涙ぐみながら、一生懸命搾り出したその声。ルキの白く細い腕が震えている。

ルキは空を見上げた。何処までも青く澄んだ空の中を、二羽の鳥が楽しそうに飛んでいる。あのものたちは、わたしに無いものを持っている――……。ルキは胸が痛くなり、思わず胸元を押さえた。

目頭が、どうも熱い。

「わたし怖いの……。おじいさまは、ああやって優しく接してくれている。でも、おじいさまはわたしより先に行ってしまう。いつか、わたしの知らないところへ……」

その声は悲しみに満ち溢れていた。ぽろぽろと零れ落ちる涙。キラリと太陽の光を浴びて、それは光る。

「わたしは一人になってしまう」

ルキはしゃがみこみ、自分の体を抱いた。今まで感じてきた不安、恐怖。愛する人の死への怖れ。

――わたしが天使だったら。

――わたしに翼さえあれば。

――おじいさまを救えるのに。

綿雲が、ふわりと群れから離れた。ぷっつり、と。わたあめのよ

うな綿雲が。
「同じですよ、僕も」
ルキが潤んだ瞳でシャンを見上げた。青い瞳が哀しげな光を放っている。海の底の深き輝き。
「同じ……」
シャンはゆっくり頷いた。
「僕も一人になるのが怖いんです。僕は、幼い頃スラム街に捨てられました」
ルキの目が見開くのがわかった。シャンはかまわず続けた。
「そこで暗い幼少期を過ごしました。食べるものも無くて、日々喧嘩の毎日。僕は怖かった。此処で生き、此処で死ぬのかと」
ルキが口元に手を当てた。その瞳が恐怖の色に染まっていくのがわかる。シャンはルキからふっと視線を逸らした。
鳥の鳴き声がする。シャンはふ、と上を向いた。鳥が大空を舞っている。何年ぶりかに、鳥籠から放された様に。
「でも、そこから僕を助け出してくれたのが、アーク様でした。僕を側近としてお傍に置いてくださった。魔導士としての道を歩ませてくださった。僕にとっては、命より大切な人です」
ルキは瞳を閉じた。風を感じるように。
「そう、あなたには守るべきひとがいるのね」
砂漠の乾いた空気を風が運んでくる。銀色の太陽は、光を失うことなく輝き続けている。ルキはシャンの瞳をじっと見つめた。何処までも深く、そして愛する人を信じ疑わぬ心。
「あなたにも居るんじゃないですか」
柔らかい微笑みを浮かべたシャン。ルキは瞳を伏せると、手を胸に押し当てた。

鎖は解き放たれたのだという。
少年は一本の剣を引き摺りながら夕暮れの坂道を上った。

重たい、大きな剣。
復讐をするために刻まれたその心の傷は、決して癒えることは無い。
少年の頬を一筋の涙が零れ落ちた。
恩師と、肉親と。奪われたものは数知れず。

四

その日は月の館に泊まる事にした。あの後シャンが戻ってきたときには、既にそういうことになっていた。ヴィラ、アーク、ファール、シャンは二階の一室に、レラはルキの部屋に泊めてもらうことになった。
レラは用意された布団の上で、クッションをぎゅっと抱きしめていた。いい香りがする。ルキの部屋は、翡翠色ではなかった。磨かれた青い色。まるでサファイアのような壁や床。歩けばカツカツと音がするし（もちろん靴を履いているときだが）床に自分の姿がはっきりと映っているのはなんだか奇妙だった。
「あの、さ。私レラっていうんだ。レラってよんで。……ルキちゃんって呼べばいい？」
ルキは突然声をかけられ驚いたようだったが、すぐににっこりと笑った。
「はい」
可愛らしい声だ、とレラは微笑んだ。ルキはベッドにもぐりこむところだった。白い寝間着に着替えた彼女は、どこか淋しげだった。
「……そろそろ寝ませんか？」
「あ、うん」
ふふ、とルキが笑みを零した。レラは何故かホッとして、「おやすみ」といって布団を頭から掛けた。旅の疲れを癒すためなのか、

レラはすぐに寝入ってしまった。
それを見て、ルキは微笑んだ。灯りを消し、枕に顔を埋める。
「おやすみなさい」
夜は更けていく。少女の心を闇の中へ放り込もうと。

滴り落ちる血が少年を染める。
憎しみに満ちたその心はいまや闇の中。
剣には真っ赤な鮮血がベットリとついている。
少年は銀色の刃をじっと眺めた。
闇に滴り落ちる赤い血。
少年の手は今、赤い血で染め上げられていた。

「眠れないのですか？」
影は、細く通る声に呼びかけられ振り向いた。館の屋上の柵に寄り掛かり、月を眺めていたようだった。驚いたように青い瞳がこちらをのぞいている。月明かりで、青白く照らされた頬。
「あ、ああ……なんだぁ。ルキか」
ヴィラだった。「お隣、宜しいですか？」とルキ。
空高く月が昇っている。青白い光の槍を放ちながら。
「静かですね」
ヴィラは頷いた。「恐ろしいほどにね」
ルキは膝を抱いた。ヴィラも、その場にすっとしゃがみこんだ。
ヒョオヒョオと吹くのは、昼間とは違う風。ルキもヴィラも、知らぬ風。
「時々怖いと感じることがある」
えっと小さくルキが聞き返した。ヴィラは以前月を眺めている。
「何が、とは言い切れないけれど……身体の「なか」が震え上がっ

ているんだ。それにたいして」
星は静かに瞬いている。藍を溶かした空に、キラリと輝く。ゴミの中に埋もれた宝石のように。
少しだけ雨のにおいがした。ヴィラは立ち上がった。
「これから起こること、これからやらなきゃいけないこと。沢山ある……」
ヴィラは口に手を添えた。瞳を伏せ、口をギュッと結んだ。
「はっきりいって、不安だよ」
ヴィラは柵を力を入れて握っていた。ギリギリと柵が少しだけ音をたてているのにルキは気がついた。ルキは風を受け止めながら、その様子をじっと見ていた。
不安なら自分の心の中にもある。ルキはヴィラを見つめていた。
ヴィラがふっと笑ったのを見て、ルキは不思議に思った。
――何故この人は不安なのに笑えるのか。
「シャンから聞いたんだ」
ルキははっとした。淋しそうに微笑むあの少年の横顔がふと浮かぶ。
「ベリからも聞いたよ……。君が天使なんだってこと」
ルキはぎゅっと足を胸に押付けた。肩が震えている。
「ルキは……天使にはなりたくないの？」
二人の間に沈黙が訪れた。ルキは瞳を伏せている。ヴィラは静かにその様子を上から見下ろしていた。青白い光は絶え間なく注ぐ。
ふと、その光が遮られた。辺りが少し暗くなった。ぼんやりと雲の間から月の光が漏れている。ヴィラは視線を左右に動かすと、俯いた。「ごめん」
ルキは目に涙を浮かべた。
「謝る必要なんかないです。私が悪いだけだから」
「え？」
「私がいけないんです。ちゃんとはっきりした意思をもてないから。だからおじいさまもためらって……！」ルキは憤慨した。

「なりたくないわけがない、私、お父様とお母様のようになれるのならなんだってする！　私には二人の血が流れているんですもの！」
ルキは叫んだ。その叫びは月夜のなか、静かにこだまする。
「天使になりたい……。私、天使になりたい」
少女の悲痛な叫び。
「私、天使になりたい！」
雲は切れることなく月を覆う。
スッ、と目の前に手が差し出された。ルキは目を見開き、顔をあげる。そこには哀しそうに微笑むヴィラの姿があった。
「それを、手伝わせてくれるかな？」
一筋。そう、ほんの一握りの希望にかけてみよう。ヴィラは本気でそう思った。
ルキは頬を熱い何かが流れ落ちたのに、気づいては居なかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5894a/

太陽と月の祈り

2010年12月26日19時16分発行